撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

タウシュベツ川橋梁

北海道上士幌町

旧国鉄士幌線が全線開通した際、音更川の支流であるタウシュベツ川に架けられた鉄道橋だ。この橋長約一三〇㍍、一一連のコンクリートアーチ橋は上部の側壁にのみ鉄筋が施されたが、橋脚部とアーチ本体は無筋。同形式の橋梁は道内では初、川原で練られたコンクリートを上部まで揚げるために丹野式巻上機といった新設備も開発され、以後の道内鉄道整備の手本となる。士幌線は沿線の農畜産物や木材の運搬を目的として整備されたが、一九五五年に水力発電を目的とした糠平ダムの建設に伴いダム湖を迂回する新線が敷設され、タウシュベツ川橋梁は湖底に沈む。士幌線も資源の枯渇、国道二七三号の開通によって貨物量が減少、一九八七年に全線廃線となった。

橋体は一月頃より湖面に姿を現し、水位が上昇する五月以降、再び徐々に水没する。幻の橋と呼ばれるゆえんだ。土木構造物より、もはやアートともいえるその佇まいから年間推計七万人もの来訪者を迎え、まちのシンボルとなってきた遺構だが、七〇回近く水没と出現を繰り返しコンクリートの膨張と収縮という凍害にも晒され続けた影響から近年その崩壊の速度が加速している。この写真を収めた土木写真家がタウシュベツ川橋梁と出会ったのは四半世紀前、以来幾度となく訪れてはその表情を捉え、五年後に写真集を上梓、土木学会出版文化賞を受賞した。今回、北海道の大地と一体となろうとしている橋を目の当たりにして言葉少なにこうつぶやく。「これはこれでいい。朽ちていく過程も遺産として遺された土木の姿だ」。奇しくも小誌本号の特集はこの橋と同時代に建設された文化財の保護と活用を扱う。時間に磨かれてきた土木と建築の語り部たちの声に改めて耳を澄ませてみたい。

上流側は特に崩壊が著しい。表皮のコンクリートが裂けて中込の石材が崩落している。その時が近づいている予感がある。